

イエスのことば 第 59 回

あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。(ルカ 12 : 8~9)

□文脈の確認

1. イエスの公生涯を起承転結の四部構成に分け、背景を理解しながら、イエスのことばを一つひとつ学んでいる。
2. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。その前半の約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。その旅行から帰ってきた後の約 3 か月の間、紀元 29 年秋 10 月から冬 12 月のまで、約 3 か月の間に起きた出来事（十字架刑は、紀元 30 年の春 4 月）。10 月には仮庵の祭り、12 月には宮清めの祭りがある。
3. 仮庵の祭りの後（ルカ 10 : 1~13 : 21）
 - ① 七十人の派遣（10 : 1~24）
 - ② ある律法学者との問答「永遠のいのちを得るためには」（10 : 25~37）
 - ③ マルタとマリアという姉妹の家にて（10 : 38~42）
 - ④ 祈りについての教え（11 : 1~13）
 - ⑤ メシア的奇跡：口をきけなくする悪霊の追い出し（11 : 14~36）
 - ⑥ あるパリサイ人の家にて：手を洗う儀式について（11 : 37~54）
 - ⑦ 弟子たちへの 9 つの教え（12 : 1~13 : 21） 弟子たち：特に、使徒たち
4. 弟子たちへの 9 つの教え（後半 4 つは群衆にも、あるいは群衆に語られる）
 - A) パリサイ人の家を出てきてから、弟子たちに。偽善に気をつけよ（ルカ 12 : 1~12）
 - B) 群衆の中からイエスへの要望をきっかけに。食欲に注意せよ（ルカ 12 : 13~34）
 - C) 主の再臨に備えて、目を覚ましていなさい（ルカ 12 : 35~40）
 - D) 忠実なしもべでいなさい（ルカ 12 : 41~48）
 - E) メシアの初臨がイスラエルにもたらす結果（ルカ 12 : 49~53）
 - F) 群衆にも。旧約聖書の預言により時のしるしを見るなら、イエスがメシアであると分かる（ルカ 12 : 54~59）
 - G) 群衆に。イエスについての考えを変えないなら、災難に遭う＝紀元 70 年のエルサレム陥落に巻き込まれて死ぬ（ルカ 13 : 1~9）
 - H) 会堂で（群衆に）。18 年間腰が曲がって全く伸ばすことができない女の人を安息日に治したことを通して、イスラエルが口伝律法とサタンによる束縛から解放される必要について（ルカ 13 : 10~17）
 - I) 奥義としての神の国の特徴。外面的には大きく成長して繁栄するかのように見える。しかし、そこには鳥が巣を作り、内面的にはパン種を含む（ルカ 13 : 18~21）

山上の垂訓での教えの再確認

熊本集会、「メシアの生涯ハイライト」にて

A) パリサイ人の家を出てきてから、弟子たちに。偽善に気をつけよ（ルカ 12：1～12）

1. 偽善に気をつけなさい＝裏表のないように、正直でありなさい

1 節 そうしているうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスはまず弟子たちに話し始められた。「パリサイ人のパン種、すなわち偽善には気をつけなさい。

- 弟子たちに・・・まわりに群衆が集まって来ているが、ここでの教えは弟子たちが対象。
- パン種・・・パン種がパンの中であってパンを膨らますように、罪の性質や誤った教えは人の内側にあって人を膨らませて、人に具体的な罪を犯させる。聖書では、パン種は、人の内側にある罪の性質や、誤った教えなどを象徴する。
- 偽善・・・弟子たちへの 9 つの教えの第一テーマは、「偽善」。イエスが先程までいたパリサイ人の家では、イエスはパリサイ人に対して次のように偽善の罪を指摘した。

「あなたがたパリサイ人は、杯や皿の外側はきよめるが、その内側は強欲と邪悪で満ちています。」（ルカ 11：39）

- 偽善に気をつけなさい＝裏表のないように、正直でありなさい

どんなに隠したところで、神のさばきのときに、すべての罪が明らかにされる

2～3 節 おおわれているもので現されないものではなく、隠されているもので知られずにすむものではありません。ですから、あなたがたが暗闇で言ったことが、みな明るみで聞かれ、奥の部屋で耳にささやいたことが、屋上で言い広められるのです。

2. 弟子たちは、パリサイ人たち指導者を恐れずに、神を恐れるべきである

4～5 節 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。

- ゲヘナ・・・悪魔と悪霊たちを最終的かつ永遠に閉じ込めるために神が準備している場所。不信者も最終的にそこに投げ込まれ、永遠の刑罰を受けることになる。

- 不信者のさばきについて

- ① 「**大きな白い御座**」(黙 20 : 11) の前で行われるさばき。いわゆる「最後の審判」である。
- ② 信者は、このさばきを受けない。
ヨハネ 3 : 18 御子を信じる者はさばかれない。
- ③ さばき主は、御子イエスである。
ヨハネ 5 : 27~29 父は、さばきを行う権威を子に与えてくださいました。子は人の子だからです。このことに驚いてはいけません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞く時が来るのです。そのとき、善を行った者はよみがえっていのちを受けるために、悪を行った者はよみがえってさばきを受けるために出て来ます。
- ④ このとき、不信者の靈魂はよみから呼び出され、永遠に死なない体を与えられてよみがえってから、神のさばきを受ける。よって、ゲヘナに投げ込まれるときは、靈魂だけではなく、体も持っている。
マタイ 10 : 28 からだを殺しても、たましいを殺せない者たちを恐れてはいけません。むしろ、たましいもからだもゲヘナで滅ぼすことができる方を恐れなさい。
- ⑤ ゲヘナで滅ぼす・・・滅ぼすとは、消滅させるではない。さばかれた人が消えて無くなるのではなく、神から永遠に分離され、二度と神のもとに帰ることができないことを意味する。本当に恐ろしいことであるが、その人は後悔の念にさいまなれながら、ゲヘナの炎の中で苦しみ続けることになる。ゲヘナの別名は、「火の池」(黙 20 : 14)。

3. 神はただ恐れるべきお方でなく、信じて頼れるお方である

6~7 節 五羽の雀が、二アサリオンで売られているではありませんか。そんな雀の一羽でも、神の御前で忘れられていません。それどころか、あなたがたの髪の毛さえも、数えられています。恐れることはありません。あなたがたは、多くの雀よりも価値があるのです。

- 二アサリオン・・・1 デナリの 8 分の 1。1 デナリは当時の一日分の労賃。一日 8 時間働くとすると、二アサリオンは 1 時間あたりの時給。

4. イエスが当時の世代のユダヤ人信者に求めることは、彼らがユダヤ人社会の圧力に屈することなく、イエスをメシアであると告白すること

8~9 節 あなたがたに言います。だれでも人々の前でわたしを認めるなら、人の

子もまた、神の御使いたちの前でその人を認めます。しかし、人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます。

- 「人々の前でわたしを知らないと言う者は、神の御使いたちの前で知らないと言われます」とは、「キリストのさばきの座」(Ⅱコリ 5:10)において報奨なしと判定されることである。

キリストのさばきの座について詳しくは、5 ページに。

- 当時の世代のユダヤ人信者たちは、初代教会のメンバーとなる信者たち。イエスを拒否したユダヤ人社会の圧力に屈することなく、イエスをメシアであると人前ではっきりと言い表すことが求められた。このような初代教会を指して、ヘブル人への手紙では「長子たちの教会」(ヘブル 12:23)と呼ぶ。

5. また、当時のユダヤ人社会の多数はイエスを悪霊につかれていると非難するが、それは聖霊を冒瀆する罪である。イエスが当時の世代のユダヤ人信者に求めることは、その多数派の罪からきっぱりと離れていること

10 節 人の子を悪く言う者はだれでも赦されます。しかし、聖霊を冒瀆する者は赦されません。

6. もし、イエスをメシアであると公言したために、弟子たちが法廷に引き出されることになったら、どう弁明しようかと悩む必要はない。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださる

11～12 節 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。

- 会堂＝宗教裁判
- 役人たち、権力者たちのところ＝民事・刑事の裁判

□ 本日の箇所 4 番、ルカ 12:8～9 を引き合いに出して、「救いを受けるためには、人前で信仰告白する必要がある」と主張するのは、正しいですか？

□ 本日の箇所 1 番、ルカ 12:1～3 を引き合いに出して、「偽善者にならないように、自分が犯した罪はすべて人前で告白して明るみに出すべきだ」というのは、正しいですか？

また、Ⅰヨハ 1:9 により、信者はだれに罪を告白するように命じられていますか？

□「キリストのさばきの座」について

- ① 教会時代の信者が、教会の携挙のあと、キリストの前に立って受けるさばき（Ⅱコリ 5：10）。キリストのまわりには、天使たちも立つ（ルカ 12：8～9）。
- ② このさばきは、ゲヘナに投げ込まれることにつながるさばきではなく、キリストの弟子としての働きに報奨を与えるか、それとも報奨はないのか、あるとすればどのような報奨か、という判定である。
 - 弟子としての働き・・・キリストのからだである教会を建て上げるための働き（Ⅰコリ 3：10～15）。
 - 報奨・・・いろいろな種類の「冠」
 - どのような報奨か・・・聖書に記されているのは 5 種類であるが、それは例示的なものであり、5 つに限定されないであろう。⇒参照「聖書が記す 5 つの冠」
- ③ 信者の清め・・・キリストのさばきの座を通ることで、信者は報奨を受け取るだけではない。報奨に値しない働き、すなわち神のみこころに沿わなかった働きはさばきを通して焼き尽くされる。不純物は取り除かれて信者は清められ、キリストとの婚礼に進む（Ⅰコリ 3：15、黙 19：7～8）。
- ④ キリストとの婚礼（天での結婚式）を終えたら、教会の信者たちはキリストの再臨に同行し、地上に帰る。メシアの王国のスタートである。その王国の建国式は、キリストと教会の信者たちとの結婚披露宴でもある。信者たちに付与された冠は、メシアの王国での彼らの権威の程度（働きの重さ）を示すもの。ルカ 19：11～27 のたとえ話は、メシアの王国での信者の権威に違いがあることを示す。
- ⑤ 千年間の王国が終わった後、次に来る新天新地（永遠の秩序）の世界では、すべての信者は平等である。

□聖書が記す 5 つの冠（信者への報奨はこの 5 つに限らない）

- ① Ⅰコリ 9：24～25「朽ちない冠」・・・あらゆることに節制して、教会を建て上げるために奉仕した信者に与えられる冠
- ② Ⅰテサ 2：19「望み、喜び、誇りの冠」・・・伝道の働きをした信者への冠
- ③ Ⅱテモ 4：7～8「義の栄冠」・・・主の現れを慕い求めた信者への冠。主の現れを慕い求めるとは、イエスの再臨を信じて聖書の教えを堅持すること。
- ④ ヤコブ 1：12、黙 2：10「いのちの冠」・・・教会に対する試練や迫害に耐えた信者への冠。殉教した信者への冠。
- ⑤ Ⅰペテ 5：2～4「しばむことのない栄光の冠」・・・信者の群れを牧する役割を担った信者（牧師、長老、監督、執事など）に与えられる冠。冠を受けるに値する条件は二つ。第一に、強制されてではなく、神に従って自発的に、また卑しい利得を求めてではなく、心を込めて世話をしたこと。第二は、割り当てられている人たちを支配するのではなく、群れの模範となったこと。